写真記録

破られた沈黙

アジアの「従軍慰安婦」たち

Itoh Takasi
伊藤孝司 ――― 編著

風媒社

写真記録
破られた沈黙
アジアの「従軍慰安婦」たち
伊藤孝

388.1
26

写真記録
破られた沈黙

ISBN4-8331-1031-8 C1036 P2400
定価二,四〇〇円(二,三三〇円+税七〇円)
風媒社

中央人文 ☎262-0050
横浜市立図書館
0005571987

クに乗りました。

大阪はもっと騒々しかったのです。朝鮮の国旗を振り、万歳を叫びながら、大勢の人が行き来していました。私は、人込み中にいた若い朝鮮人に「富山に連れて行って欲しい」と頼みました。その人に連れられて汽車で伏木の朝鮮人の家に行ったのです。

その家でしばらく働きました。そこの主人とその子どもたち・兄弟たちが朝鮮に戻ることになり、一緒に汽車で大阪へ行きました。そして、80トンくらいの船を闇で雇ったのです。その船の中で、私は自分の身の上が悲しくなりました。そして、玄界灘に身を投げようとしたのですが見つかってしまいました。

富山で「挺身隊」として働いた時も、捕まえられて「慰安婦」にされた時も、お金はもらうどころか見たこともありません。

私たちは雨や雪が降っても風が吹いても、不自由な体で毎週水曜日に日本大使館前に集まっています。そして「良心的な謝罪と償いをしてくれ」と叫んでいます。お金をくれというのではありません。私たちが犠牲にされたようなことが、2度と繰り返されないようにして欲しいのです。

帰国してからも惨めな生活をしてきましたが、これからの余生をどう生きていけるのか心配です。

女性たちは、日本大使館に対して抗議のホイッスルを一斉に吹いた

李 容洙（イ ヨンス） Lee Yong-Su

1928年12月13日生まれ
大韓民国ソウル市在住

謝罪と補償が実現して恨が拭えるまで死にません

李さんは、同じ大邱市に住む文玉珠さんと以前から付き合いがあったが、同じ被害女性だとは知らなかったという

長野市松代での集会。どこの会場でも満員になるほど多くの人々が集まった

私は大邱（テグ）で生まれました。家は貧しくて、国民学校に入学したもののすぐに夜学に移りました。

1944年夏のある日、酒屋をやっていた友だちのお母さんが「今のような苦しい生活をしている必要はないじゃないか。私の言うところに行けばご飯がたくさん食べられ、豊かな生活ができる」と言いました。ですが私は「嫌だ」と言って飛び出て来ました。

それから何日かすると、その友だちが私の家に来て手招きするのです。外に出ると、そこには軍服みたいな服を着た男がいて、3人の娘を連れていました。その男は私に包みを渡しました。友だちが「それは簡単服（ワンピース）と赤い靴が入っている」と言いました。私は、こうした新しい物を生まれて初めてもらった嬉しさで感激しました。

この男に「一緒について来るように」と言われ、私と友だちも含めた5人の娘が連れられて駅に行きました。それまで私は汽車に乗ったことがありませんでした。汽車の中では、私は車酔いで泣いていました。

慶州（キョンジュ）で降りて旅館に入りました。その時に見た、窓の外に咲いていたトラジ（キキョウ）の花が、今でも頭にこびりついて離れていません。

2～3日すると、男はさらに2人の娘を連れて来たので、合わせて7人になりました。再び汽車に乗せられ、北の方に走り出しました。すると、汽車の中から私の家が見えたのです。「オンマ（お母さん）助けてください！」と泣き叫んだものの、汽車は止まらないしオンマも見つけられず、私はうずくまってしまいました。

そして着いたのは平安北道（ピョンアンブクド）の安州（アンジュ）でした。ここの小さな家で1～2カ月いました。私はもらった簡単服と靴は身につけず、家から着てきたボロを着ていました。それは、そのまま返せば家に帰してくれると思ったからです。

次に、相当長い時間を汽車に乗せられて、降りたのが「満州」（中国東北地方）の大連でした。2日すると港に連れて行かれました。そこには大きな船が12隻停泊しており、すべてに日本海軍の兵隊が乗っていました。私が乗せられた船には300～400人の兵隊でした。

上海（シャンハイ）で1945年の正月を迎えました。私は軍歌を歌わされましたが「上手に歌った」と、ほうびに餅を2つもらい、船倉に戻ってから友だちと分けて食べました。

戦争の真っ最中だったので、何度も待避しながらの航海でした。ある日、波が高くて船が揺れたので、船に乗るのも初めてだった私は船酔いをしてしまいました。便所で吐いていたら、兵隊たちがやって来る気配がしたので、あわてて出ようとしました。ところが押し込められてしまい、私に暴行を始めたのです。兵隊の腕に噛みつきましたが、私は犯されてしまったのです。

死ぬ思いで逃げ出したものの、また気分が悪くなりました。友だちと一緒に便所に行ったのですが、今度は友だちも犯されてしまいました。それ以降、航海中に何度も犯されたのです。

名古屋市の「三菱重工道徳工場」跡で、「女子勤労挺身隊」として軍需工場に連行されて犠牲になった朝鮮人少女たちへ花を捧げた(左)

激しい空襲を受けて沈没しかけている前の船から、「助けて、助けて」と叫んでいるのが聞こえました。翌朝、甲板に出てみると他の船の姿が見えないのです。私たちの船だけが残ったわけです。

さらに航海を続け、着いたのは台湾でした。連れて行かれた建物には、私たちより年上の10人ほどの女性がいました。この家は「慰安所」だったのです。女性たちは日本の着物を着ていましたが、みんな朝鮮人でした。家の主人は日本人で、日本人の妻と朝鮮人の妾がいました。

こうして、日本兵を相手に「慰安婦」生活が始まりました。私はここでは「安原トシ子」と呼ばれました。1日4～5人、日曜日には10人もの相手をしなければなりませんでした。女性たちの中で私が一番年下でした。

私は、どうしてもこの生活に耐えられず逆らいました。すると、家の主人に電話線のようなものを腕に巻かれ、電流を2～3回流されて失神してしまいました。そして丸太で叩かれたのです。今でも、腕や首にその痕が残っているほどです。このことで「逆らったら命がなくなる」と思いました。

空襲警報が鳴ると防空壕に入りました。ある日、爆撃で家だけでなく濠もつぶれ、その中に埋まってしまいました。気がつくと顔中が血だらけでした。友だちの名前を呼んでも返事がありませんでしたが、土を掘り続けたら生きていました。

この時、家の主人の妾と私たちの仲間1人が亡くなりました。家はつぶれて跡形もないほどでしたが、それでも兵隊たちが来るので相手をしなければならなかったのです。田んぼ・野原などに連れて行かれ、水が溜まっていても布を敷いただけで兵隊の

要求に応じなければなりませんでした。私がマラリアにかかり、体が震えていた時でさえも相手をさせられたのです。

「慰安所」は建て直され、また部屋の中で相手をするようになりました。「長谷川」という「特攻隊」の兵隊が、明日飛び立つということで、写真・洗面道具・手拭い・石鹸をくれました。そして「——金波銀波の雲乗り越えて、誰も見送る人さえなくて、泣いてくれるはトシ子１人だ」（日本語）と泣きながら歌ったのです。一晩中、抱き合って男から歌を聞きました。翌日、彼は去って行きました。

このことからしばらくすると兵隊があまり来なくなり、外の雰囲気が静かになりました。「姉さん」たちが、初めて朝鮮語を使って「解放された」と小さな声で言いました。私には「解放」が何のことなのかわからなかったのですが、「あなたは家に戻るのだよ」と私をさすりながら教えてくれたのです。

何日かしてから、私たちは収容所に行きました。そこで握ってくれたご飯には、真っ黒なくらい虫が付いていましたが、それでも食べました。そして、毛布を被っておびえていました。

ある日「船に乗るように」と言われましたが、「また、どこかに連れて行かれるかもしれない」と恐れました。だけど、破れかぶれの気持ちで乗船したのです。

結局、船は釜山に着きました。ここでＤＤＴ（殺虫剤の一種）を噴霧され、３００ウォンを手渡されました。連れて行かれる時から一緒だった５人は、１人が亡くなって４人になっていました。

友だちに別れを告げる暇もなく、汽車に飛び乗りました。家に着いてみると、お母さんが弟に「今日はお姉さんの法要の日だから、早く支度をしなさい」と言っているではありませんか。私が「オンマ！」と呼んだところ「私の娘は３年前に死んでしまっていない」と言うのです。そして「ここにいるおまえは人間でなく幽霊だ」と私を見向きもしないのです。私が抱きつくとお母さんは失神してしまいました。私が死んだと思ったお母さんは、私の誕生日に法要をしていたそうです。

私は16歳で連れられて行き、19歳で帰って来ました。ですが、踏みにじられて病んだ体で、嫁に行って子どもを生めるでしょうか。結婚できなかったのは私だけではありません。

日本政府は幼い子どもたちに罪を犯したのです。私たちのところに来て良心的な謝罪をして補償しなければなりません。それが実現して恨（ハン）が拭えるまでは私は死にません。

私が詩を書いて「ムグンファ（ムクゲ）姉妹会」（韓国の被害女性たちの親睦会）でも歌っている替え歌があります。

「ああ！　日本よ日本／日本は謝罪して賠償してくれ／青春を戻せ／償ってくれ／流れた無窮花（ムグンファ）姉妹たちの人生を省みて」